



▲図書館まつりでパネルシ
アターを行う『おはなし
ほけっと』



▲本のテーマ展示



▲市立図書館の幼児室

す。

「子どもは、物心がついてくるとお気に入りの本を何度も読みたがりません。その子の成長に合った本を選ぶことが大切なので、図書館などを利用するのもいいと思います。親は一度借りたことのある本は、なかなか借りようとしませんが、子どもは同じ本を借りたがることはありません。子どもが借りたと言った本は、同じ本でも借りてあげてください。それで、何度も借りたがるようであれば、そのときに買ってあげる方法をとると経済的です。親に読んでもらった本を成長とともに自分で読み、大人になってから自分の人生経験を振り返りながらも一度読むと、



須藤 和恵さん

その本の真意や意図が分かるようになります。絵本は本への愛着の基礎になります。子どもに読書の習慣を身に付けさせたいという保護者の方はいると思いますが、絵本などは10分ぐらいで読めますので、親子で本に親しむ時間をつくるのが良いと思います」と話してくれました。

ぜひ、市立図書館を利用してください

「わたしの薦めた本を子どもが気に入って書店などで購入したという話しを聞くとうれしくなります」と話すのは市立図書館の司書、高木三千子さん。



高木三千子さん

「いつの時代でも、親子の読書傾向は一致しません。図書館に来て幅広く読む工夫をすると良いのではないのでしょうか。本は生きる力になりますし、考える力を養うものだと思います。子どもは、表紙などで本を選ぶという傾向があります。図書館にはたくさん本があり、お薦めしたい本もありますので、子どもが読んでみたい本に出合えるかもしれません。図書館では、ボランティアの方に読み聞かせをしていただいたり、毎月テーマを決めて本の展示をしたりしているんですよ。本の展示は、今年の3月で100回になり、皆さんからも好評を得ています。本を手渡す司書として、市民の皆さんのお役に立てるよう、これから

も活字文化を大切にしたいですね。ぜひ、図書館を利用してください」と話してくれました。

子どもたちの可能性の芽を育てたい

高木さんにお話を伺った際に『読む力は生きる力』（脇明子著）という本を紹介してもらいました。そこには小学校高学年から読書離れる子どもの多くは、小学校中学年までに『なんでもいいからたくさんの本』を早く読み終えることに夢中になり、『本はおもしろい』と実感した経験が無いこと。また、子どもは字が読めるようになってからも想像力がなければ本の内容を理解できないので、大人が読み聞かせをして想像力や感情の動かし方のお手本を示すことが必要であること。複雑で困難な世の中をうまく乗り切るために読書が大きな助けになることなどが著されていきました。

子どもが絵本を楽しめるようになったら、次は『お話し』を体験させてみてください。自分でイメージすることで、思考力が高まり読書がもっと楽しくなると思います。豊かな心をはぐくむような良書を子どもたちに届け、子どもたちの新しい可能性の芽を育てるのはわたしたち大人の責任であると感じました。